

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02095

研究課題名(和文)映画祭のポリティックス：米国と日本のクィア・LGBTコミュニティ/アクティビズム

研究課題名(英文)Politics of Film Festivals: Queer LGBT Community/Activism in the US and Japan

研究代表者

菅野 優香 (Kanno, Yuka)

同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・准教授

研究者番号：30623756

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：編著『クィア・シネマ・スタディーズ』(晃洋書房、2021)に加え、「クィア・シネマの現在」『Inside/Out 映像文化とLGBTQ+』(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2020)、「コミュニティを再考する クィア・LGBT映画祭と情動の社会空間」『クィア・スタディーズをひらく』(晃洋書房、2019)、「政治的なことは映画的なこと 1970年代の『フェミニスト映画運動』」『思想』(2020)等の論文を刊行した。また、学会発表や講演、シンポジウムなどをおして研究成果を発信するとともに、国内外の研究者やクィア・LGBT映画祭関係者、アクティヴィストとさまざまな意見交換を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果として発表した論考は、映画の社会的役割に関連するものであり、とりわけ地方のクィア・コミュニティがいかに映画祭を通して生成されるかを考察したが、同時に、クィア・LGBT映画祭に先行して「映画運動」を牽引した女性映画祭についての歴史的考察も試みた。クィア・LGBT映画祭に関する研究は、少なくとも日本では初めてのものであり、映画研究とクィア・スタディーズの両方の分野にとって、学術的意義があったと確信している。また、地方のアクティヴィズムに注目することによって、よりリージョナル/ローカルなコミュニティ生成のプロセスを重視した点に、本研究の社会的意義が見出されるはずである。

研究成果の概要(英文)：The research results include the following publications: Queer Cinema Studies, ed. Yuka Kanno(Koyoshobo, 2021), "The Present of Queer Cinema" (Waseda Daigaku Tsubouchi Shoyo Hakushi Kinen Engeki Hakubutsukan, 2020), "Community Reconsidered: Queer/LGBT Film Festivals and Affective Social Space," in Queer studies o hiraku (Koyo Shobo, 2019), and "the Political is Cinematic: Feminist Film Movement in the 1970s" in Shiso (2020). The results were also conveyed through conference presentations and invited talks and presentations at a number of symposiums and other events in order to exchange views and share thoughts with researchers, those who are involved in queer and LGBT film festivals, and activists inside and outside Japan.

研究分野：映画研究

キーワード：クィア LGBT 映画祭

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当初、まだまだ未開拓の分野であった「映画祭」研究は、近年映画・メディア研究において最も盛んに研究される一分野に成長した。商業的な長編劇映画は映画館を中心に、近年ではストリーミングサイトなどでもアクセスが可能となったが、オルタナティブなテーマや内容、美学や形式をもった映画作品は、上映される場所が限られてきた。長年にわたって、そうした作品に場所を提供してきたのが映画祭であった。だからこそ映画祭は新たな映画文化を創造する力を秘めており、グローバルな力学とリージョナル/ローカルな力学が折衝し、文化、経済、社会、政治の諸要素が複雑に交錯する実験場としての役割を果たしてきたのである。本研究はそうした映画祭のなかでも、クィアやLGBTをテーマとする映画祭に焦点を当てた。1977年、サンフランシスコで初めて性的マイノリティのための映画祭が開催されて以来、現在では、世界各地で200以上ものクィア・LGBT映画祭が開催され、日本でも、1992年の東京国際レズビアン&ゲイ映画祭を皮切りに、現在、6つのクィア・LGBT系映画祭が開催されている。メディアにおける昨今のLGBTブームの後押しもあって、クィア・LGBTをテーマとした映画祭は増加しているものの、こうした実践面での活発さに比べ、学術研究としての映画祭研究は発展途上の分野であったことが、本研究を開始したことの背景にある。本研究代表者は、2012年からこのテーマに着手し、2013年からは科学研究費助成(挑戦的萌芽研究「クィア・LGBT映画祭とオルタナティブなコミュニティの生成」、2013年度~2015年度)を得て、日本国内6都市、および、ソウル、台北、バンコクなどで調査を実施し、その成果を学術論文として発表してきた。さらに、日本のクィア・LGBT映画祭については、ウィーン大学(オーストリア)や東京大学におけるシンポジウム、コロンビア大学(アメリカ)のセミナー等で講演、発表を行い、国内外の研究者とさまざまな意見交換を行ってきた。こうした研究を踏まえ、クィア・LGBT映画祭に関する研究をさらに発展させるべく着手したのが本研究課題である。

2. 研究の目的

本研究は、米国および日本において、クィア・LGBT(レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー)映画祭が果たす社会的役割について分析し、理論化しようとするものであった。とりわけ、地方都市におけるLGBTをテーマにした映画祭の増加に注目し、映画というメディアが性的マイノリティの個人的・集合的アイデンティティに及ぼす影響を分析しながら、大都市とは異なる地方のクィア・コミュニティ生成に関する考察を行うことを目指した。そして、メディアを媒介とした社会運動、すなわち、メディア・アクティビズムとしてのクィア・LGBT映画祭が作り出す「社会空間」とコミュニティを、トランスナショナルな視座から理論化し、理論と実践、都会と地方を架橋するクィア・LGBT映画祭論を提示しようとしたのである。本研究では、新たな対象地域として米国を付け加えた。それは、米国におけるクィア・LGBT映画祭が、その数とテーマの多様性において最も豊富であるだけでなく、日本と同様に、地方都市で映画祭が活発化していたからである。また、性的アイデンティティやコミュニティ、アクティビズムに関する膨大な研究の蓄積もあったからである。米国において「田舎性」(rurality)と強く結びつけられている地方都市の事例を参照しながら、これまで行ってきた映画祭研究をさらに発展させ、映画祭が地域のさまざまなコミュニティと結び関係性についてトランスナ

シヨナルな視点から分析し、地方に生きるクィア・LGBT 当事者が、映画というメディアを媒介として、どのようにアイデンティティやコミュニティを構築していくのかを理論化することが本研究の目的であった。日本においても一見、LGBT の可視化が進んだように見えるが、実際には多彩なアクティビズムと学術研究とが有意義に接合されておらず、とりわけ文化研究とアクティビズムとの連携は今でも十分とは言い難い。したがって本研究では、LGBT 映画祭の多岐にわたる実践とクィア・スタディーズにおける理論的成果とをつなぐことを目指した。

3．研究の方法

米国内のクィア・LGBT に関する映画文化とアクティビズムの歴史および現在の状況を把握するための文献資料調査を行い、次いで、米国および日本の地方都市で開催される映画祭の実地調査を行い、最終的には、それらを総合した理論的考察を行う予定であった。文献資料調査と理論的考察については、予定通り行うことができたものの、2018 年から 2019 年にかけての在外研究、および 2020 年からの新型コロナウイルスの世界的拡大によって、調査を予定していた米国中西部（オハイオ州、ミズーリ州）と南部（ケンタッキー州、テキサス州）の映画祭がすべて延期・中止となったため、調査対象を日本のみに変更することを余儀なくされた。日本でもクィア・LGBT 映画祭のほとんどが延期・中止となったが、開催された「あいち女性国際映画祭」および「香川レインボー映画祭」には参加し、プログラミングや運営に関する調査を実施することができた。最終年度には、クィア・LGBT 映画祭がメディア・アクティビズムとして果たす社会的役割と地域コミュニティとの関係についてデータを整理し、分析を行った後、地方都市におけるクィア・LGBT 映画祭について以下の理論化を行った。(1)「弱いコミュニティ」の理論へ向けて 映画祭が集合的なアイデンティティとしてのコミュニティを構築するプロセスを分析し、対抗的であるよりも、地域アイデンティティと性的アイデンティティとが交差する地点で、日常を生きることを可能にするような、ゆるやかで持続的な集合的経験としての「弱いコミュニティ」を理論化。(2)「社会空間」としてのクィア・LGBT 映画祭 アンリ・ルフェーヴルの社会理論や、ドリーン・マッシーの空間論、スコット・ヘリングのクィア都会主義批判を参照しながら、流動的で可変的な情動の空間、多様性の存在可能性の領域としての社会空間としてクィア・LGBT 映画祭を理論化。

4．研究成果

本研究期間中、クィア・LGBT コミュニティ、アイデンティティ、映画文化に関連する多数の論考を発表すると同時に、学会発表、シンポジウム、講演を通じて研究成果を国内外に向けて発信し、研究者やクィア・LGBT 映画祭関係者、アクティヴィストとさまざまな意見交換を行った。とりわけ本研究に関連の深い論考を数点選び、以下に記す。

「コミュニティを再考する クィア・LGBT 映画祭と情動の社会空間」『クィア・スタディーズをひらく』菊地夏野編（晃洋書房、2019 年）では、映画祭という集合的経験をもたらす文化実践が、地域コミュニティとどのように折衝していくかに焦点を当て、「情動」および「社会空間」という概念を軸にした映画祭の理論化を試みた。社会空間は、社会関係の産物であり、同一性や一体性よりも異質性や不連続性、断片性によって特徴づけられる動的な空間であり、時間性や関係性、身体性が重視される空間である。そうした視点から、多種多様な人々とその身体、モノや環境の間の相互関係や作用を

通して構成される「社会空間」としての映画祭の理論化である。とりわけ身体によって再編成される空間としての映画祭を考えたときに重要なのが「情動」の概念である。ブライン・マッスミによれば、情動にとって重要なのはある身体から別の身体へと伝播するプロセスという集合的な次元であり、身体を取り囲む環境を融合して醸成される政治性である。多様な人々が集まり、ある空間に身を置くことによって引き起こされる情動的な経験を介して、観客は映画祭という場を創造していくの。こうした情動的な社会空間としての映画祭を考えることによって、コミュニティという概念を再考しようとしたのが本稿である。「政治的なことは映画的なこと 1970年代の『フェミニスト映画運動』」『思想』1151号(2020年)においても、映画祭の役割に注目しながら、1960年代後半から1970年代にかけて北米やイギリスで起こった「フェミニスト映画運動」について考察した。映画祭は、制作、上映、批評、理論が混沌一体となった「フェミニスト映画運動」の核心にあったからである。女性運動を背景に生まれた多くの自主制作映画は、既存の配給ネットワークに参入できず、制作者たちは自分たちで配給組織を立ち上げ、私的な上映会を開いたり、学校や図書館といった公共施設へと上映の機会を広げていったが、こうした上映活動の延長上にあったのが映画祭であった。とりわけ、1972年にNYで開催された「国際女性映画祭」(Women's International Film Festival)は上映という側面からフェミニスト映画運動を強力に推進した。フェミニスト映画の「観客」を創造し、「作り手」を支援する女性映画祭は、公的なフェミニスト映画空間を拓いたが、クィア・LGBT映画祭の原型のひとつをそこに見出すことができるだろう。さらに、研究代表者が編著者となった『クィア・シネマ・スタディーズ』(晃洋書房、2021年)は、クィア・LGBT映画にさまざまな分野からアプローチし、作品分析にとどまらず、制作や映画上映にも光を当てたアンソロジーである。本書の刊行によって、映画研究とクィア・スタディーズを架橋するという本研究の目的が果たされたと考えている。

学会発表、シンポジウムで行った発表や講演はその後、発表された論文の土台となったものであり、質疑応答や、他のシンポジストとの対話もまたきわめて有意義なものであった。本研究に直接関連するもののみを挙げておくと、公開シンポジウム「映像と性の政治」で発表した「映画祭と情動：クィア・アーバニズム批判」、(国際基督教大学、2017年3月5日)や、シンポジウム「クィア/アクティヴィズム」で発表した「クィア映画の政治と美学」(ココロ人権センター、博多市、2018年2月25日)、国際シンポジウム *Cinema and Social Change in Japan* で発表した“Community building and Queer Activism through Film Festivals”(京都大学、2017年10月22日)、英国でのオンライン公開セミナー *Queer Cinema in the West and Japan* で発表した“Activist Films and Queer Communities in Japan”(The Daiwa Anglo-Japanese Foundation Seminar, March 18, 2020)などがある。いずれの学会、シンポジウム、セミナーにおいても映画研究者や映画祭プログラマー、アクティヴィストと具体的な意見交換を行うことができた。

最終年度には、国内外のクィア・LGBT映画祭関係者、アクティヴィスト、地域コミュニティ関係者を招いて国際シンポジウムの開催を予定していたが、これも新型コロナ感染拡大の状況を鑑み、中止せざるをえなかったが、論文、学会発表、シンポジウム、セミナーを通じて本研究の成果は国内外に広く発信できたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 菅野優香	4. 巻 52:4
2. 論文標題 「時間の映画：グザヴィエ・ドランのスローモーション」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 66-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 菅野優香	4. 巻 10
2. 論文標題 「原節子の再発見」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立映画アーカイブ NFAJ ニュースレター	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 菅野優香	4. 巻 743
2. 論文標題 「静かにつながる女性たち、饒舌に孤立する少女たち --アメリカの女性映画作家と山戸的「女の子」映画」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 112-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 菅野優香	4. 巻 103
2. 論文標題 「ジュディ・ガーランドを愛するということ キャンプ・ドラッグ・フェミニズム」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 映像学	6. 最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野優香	4. 巻 1151
2. 論文標題 「政治的なことは映画的なこと 1970年代の『フェミニスト映画運動』」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 105-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野優香	4. 巻 11月号
2. 論文標題 ヒッチコック問題 『レベッカ』と『マーニー』をめぐるフェミニスト/クィア批評	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文藝別冊 ヒッチコック生誕120年	6. 最初と最後の頁 122-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野優香	4. 巻 101号
2. 論文標題 北村匡平著 『スター女優の文化社会学 戦後日本が欲望した聖女と魔女』書評	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 映像学	6. 最初と最後の頁 192-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 3件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Yuka Kanno
2. 発表標題 The Films She Wanted to Make: The Queer Life and Work of Sakane Tazuko
3. 学会等名 Association for Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuka Kanno
2. 発表標題 Activist Films and Queer Communities in Japan
3. 学会等名 Queer Cinema in the West and Japan, The Daiwa Anglo-Japanese Foundation Seminar
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅野優香
2. 発表標題 クィア・シネマとは何か
3. 学会等名 Queer Visions in East Asia: アジア人文学からクィアを考える (京都大学全学シンポジウム)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菅野優香
2. 発表標題 映画とLGBTQ
3. 学会等名 LGBTスタディーズII (エソール広島)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yuka KANNO
2. 発表標題 Queer Girls' Cinema as Counter-Climax Cinema
3. 学会等名 Society for Media and Cinema Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuka KANNO
2. 発表標題 Community Building and Activism through Film Festivals
3. 学会等名 International Symposium: Cinema and Social Change in Japan (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菅野優香
2. 発表標題 女性映画人の発掘 クィア/フェミニスト映画史の視点から
3. 学会等名 シンポジウムシンポジウム「アーカイブと理論：東映とその可能性」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菅野優香
2. 発表標題 クィア映画の政治と美学
3. 学会等名 シンポジウム：クィア/アクティヴィズム(招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 菅野優香(編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 185
3. 書名 クィア・シネマ・スタディーズ	

1. 著者名 Yuka KANNO	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 396
3. 書名 “When Marnie Was There: Female Friendship Film and the Genealogy of Queer Girls' Culture,” Routledge Book of Japanese Cinema	

1. 著者名 Yuka KANNO	4. 発行年 2020年
2. 出版社 BFI/Bloomsbury	5. 総ページ数 624
3. 書名 “Queer Resonance: The Stardom of Miwa Akihiro,” The Japanese Cinema Book	

1. 著者名 菅野優香	4. 発行年 2020年
2. 出版社 クィア・シネマの現在	5. 総ページ数 124
3. 書名 Inside/Out 映像文化とLGBTQ+	

1. 著者名 菅野優香	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 17
3. 書名 「ハイスミス映画のクィアと逸脱 --冷戦下のホモセクシュアリティ」『クィアと法 性規範の解放 / 開放のために』	

1. 著者名 菅野優香	4. 発行年 2019年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 24
3. 書名 「コミュニティを再考する クィア・LGBT映画祭と情動の社会空間」『クィア・スタディーズをひらく』	

1. 著者名 菅野優香	4. 発行年 2019年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 23
3. 書名 「洞窟からクリプトへ 山城知佳子『肉屋の女』を読む」『ジェンダーと生政治』（戦後日本を読みかえる第4巻）坪井秀人編	

1. 著者名 菅野優香	4. 発行年 2018年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 14
3. 書名 「『女であること』、あるいは川島雄三であること」『川島雄三は二度生まれる』川崎公平・北村匡平・志村三代子編	

1. 著者名 菅野優香	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 917頁
3. 書名 『アメリカ文化辞典』（執筆担当「クィア」「HIV/AIDS」）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------